＜今をとらえる＞

高知県の宝石珊瑚とチリの農業

中西三紀

2009年4月に高知大学に職をえたとき、せっかくだから何か高知に関する研究もしてみようかと考えました。そんな折、同僚の先生が宝石珊瑚の研究プロジェクトに誘ってくださり、その時与えられたテーマは「宝石珊瑚と地域経済」でした。これが実に興味深いのです。

日本における宝石珊瑚の中心は高知県であるといっても過言ではありません。高知県における宝石珊瑚の歴史は古く1812（文化9）年にまでさかのぼることができ、県の指定特産品第1号です。量はもとより、日本国内で採取される原木の質、取引、加工業の集積等々の面でも中心地の役割を果たしており、例えば、県内産はもとより県外産もすべて、原木入札会は高知県で開催されています。国内のみならず、世界的にも有数の産地で、「血赤（ちあか）」と称される高知県産の色の濃いアカサンゴは、国際市場では「トサ」の名で流通しているほどです。

多くの日本の地場産業同様に、高知県の宝石珊瑚もさまざまな問題をかかえています。一例をあげれば、珊瑚は高価なもの、または年寄りのものといったイメージを払拭できなかった結果、宝飾品としての珊瑚の売り上げは年々減少を続け、加工業における担い手の減少と高齢化といった事態に立ち至っています。

しかし一方で、宝飾品としての製品販売の不振を相殺する勢いで、近年、日本からの宝石珊瑚の原木輸出が拡大しています。輸出先は台湾、香港、韓国であり、2008年には、台湾への輸出が輸出総額の90.8%を占めました。ただし、台湾は加工地であり、最終的な商品販売市場は中国だといわれています。経済成長にともなって成立した新興富裕層の宝飾品への需要が増大しているためです。

原木輸出の拡大は、国内の原木価格の高騰をひきおこしており、ここ数年、原木落札価格は過去最高を更新し続けています。このことが、台湾等の安価な労賃を利用したアジアの加工業に太刀打ちできないまま、製品販売不振に悩み続けている国内加工業者の苦境に拍車をかけていることは想像に難くないでしょう。

当面の研究課題は、日本で採取された原木の川下に至るまでの流れを、アジア諸国との宝石珊瑚をめぐる歴史と日本産原木のグローバル化に留意しつつ明らかにすることと、高知県の漁業構造に留意しつつ、珊瑚漁のしめる地域的差異を明らかにすることです。

ところで、長々と宝石珊瑚のことを書き連ねてしまいましたが、現在でも、私の主たる研究対象はチリ農業です。正直にいえば、最初に宝石珊瑚について調べてみようと思ったときは、本来のチリ農業研究が行き詰った時の気分転換になるだろうからぐらいの気軽な気持ちでした。しかし、当たり前のことですが、研究とはそんなに単純なものではありません。これまでチリの分析に基づいて自分なりにつくりだしてきた、例えば、世界市場とはとか、グローバリゼーションとはといった考えに、国も、歴史も、産業構造も異なる、それも初めて手をつけた水産物の研究が、じわじわとボディーブローのように効いてきて、再考を迫るのです。今のところ、私のなかで、チリ農業と宝石珊瑚はファイルに分けられた別個の分析結果としてしか存在していません。しかし、いつの日か、チリ農業に軸足をおきながらも、宝石珊瑚からも何らかのフィードバックを引き出せるような、そんな状態にファイルを並べ直したいと思っています。

（高知大学人文学部国際社会
コミュニケーション学科）